

## スイーツセミナー 3

5月16日(土) 15:05 ~ 15:55

第6会場 福岡国際会議場 4F (409+410)

# 知覚・痛覚定量装置 PAIN VISIONの運用と有用性

講演者：三木 俊(東北大学病院 生理検査センター 生理検査部門長)

司会：倉重 康彦(社会医療法人天神会 古賀病院21)

共催：ニプロ株式会社

痛みはすべての診療科で取り扱う重要な危険信号である。しかし、痛みの大きさは主観的な感覚量であり定量的な評価は難しいとされてきた。これまで Visual analogue scale (VAS) という方法が広く用いられていたが、VASは患者の主観的な評価でその時の患者さんの感情などによって左右されやすく、正確な評価をするのが困難であった。近年、知覚・痛覚定量装置 PAIN VISION が開発され、これまで用いられてきた VAS が患者の主観的な評価であったのに対し、痛みの客観的な評価を行うことが可能となった。しかし、新しい検査であり、まだまだ臨床的に広く普及しているとは言えないが、東北大学病院では2013年に生理検査に導入され、多くの診療科からの依頼を受け、臨床と研究に貢献している。

検査の原理は患者が持つ痛みの強さを、痛みを伴わない電気刺激による感覚の大きさと比較し、痛みに対応する感覚の大きさを刺激電流値として定量化している。すなわち、皮膚に痛みを発生させないパルス状電流を与え、刺激量を漸増させながら痛みと刺激感覚の大きさを比較し、痛みの大きさに相当する感覚を与えた電流値を、痛み対応電流値と定義している。一方、患者の電気刺激に対する閾値(増大する電気刺激を最初に感じた値)を電流知覚閾値と定義している。電流知覚閾値を設定する理由は、電極と皮下の神経系との相対的位置や、それを感覚として脳内で認知する際の個人差によるばらつきを消去するためである。

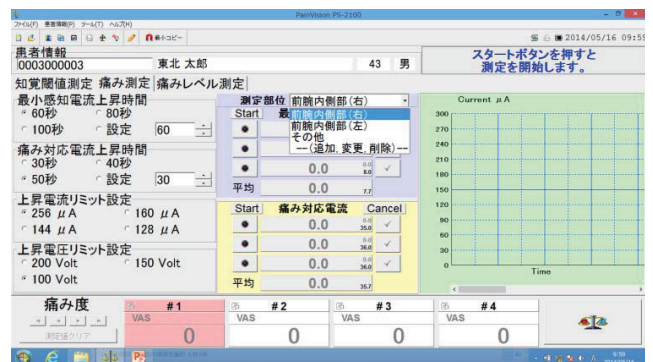
生理検査は検査条件によって検査値が左右される場合も多く、施行者は検査時の状況や再検査の必要性などを考慮し、正確な検査結果を臨床に報告しているが、検査条件や検査方法を統一することが望ましい。今回、PAIN VISION を用いて健常者を対象とした様々な条件の下での知覚の閾値測定の検討と当院での測定法を紹介する。また、新しい指先電極を用いた試験や当院での電子カルテの連携とカスタマイズを交えて知覚・痛覚検査の有用性について述べたい。



PAIN VISION 検査



PAIN VISION 機器画像



PAIN VISION 測定画面